

「保育現場における器楽指導について」

～鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察～

平澤 節子

《 概要 》

本稿では、筆者が上田市内保育園で行う『音楽あそび教室』における鍵盤ハーモニカ指導に焦点を当て、そこで行われる集団指導下での鍵盤学習方法からその有効性を探り、幼児期における音楽指導の在り方を考察した。加えて、本学幼児教育学科における器楽教育、特に鍵盤学習初心者への指導方法や今後の授業の可能性についても考察した。

《 キーワード 》 鍵盤ハーモニカ・ソルフェージュ・鍵盤学習

1、はじめに

幼児期の音楽教育は広義では母親の歌う子守唄から始まるが、民間の音楽教室へ通うケースを除けば、保育現場での活動がその第一歩である。内容は手あそび、輪遊びといった遊びを通じた唱え歌（遊び歌）から、季節や行事ごとを題材とした楽曲の歌唱、身近なもので音の出る楽器を作る手作り楽器作成から簡易楽器奏やアンサンブルを行う器楽、保育者の歌声や奏でるピアノの音色など活きた音楽に触れ、音楽会を通じて仲間の演奏に耳を傾ける鑑賞であり、「歌唱・器楽・鑑賞」この3点が音楽教育の大きな柱となる。

これらの指導は教える側に専門の知識と技術そして経験がないとなかなか集団指導下で効果が上がらないのが現状である。本稿では筆者が平成12年度から行った上田市内保育園での音楽指導を基に、幼児教育現場での器楽指導の在り方とその方法の検証、加えて保育者養成校における特に鍵盤学習初心者に対する指導方法や、在学の2年間で習得すべき音楽力について注目していきたい。

2、保育現場における器楽指導

保育現場における器楽活動は、ヴァイオリンやフルートなどメロディを奏する楽器ではなく、叩いたり振るだけで音が出る打楽器の使用が主流である。その種類はタンバリン、鈴、カスタネット、トライアングル、マラカス、ギロ、ウッドブロック、大太鼓、小太鼓、シンバル等の音程のない楽器である。保育現場では、身の回りの物を叩いたり振るなどして、音を出す楽しみを味わわせることから指導が始まり、自分自身で楽器を手作りして、その音色を工夫したり、歌に合わせて自由に鳴らす活動を経て、運動会や音楽会で、鼓笛隊（鼓隊）や合奏の活動に繋がる事例が多い。器楽指導も始めは打楽器を自由に打ち鳴らしてその音色を楽しみ、次第に楽器の形や鳴らし方によって音色が異なることに気づき、リズムパターンをピアノに合わせてテンポ通りに刻めるようになったら、徐々にアンサンブルへと発展させていくやり方が一般的である。簡易打楽器は構造上音程を操作することができないため、メロディを奏することができず、従って1曲全てを打楽器で演奏することは難しい。このため

音色の異なる打楽器をいくつか組み合わせてリズムパターンを形成し、ピアノやオルガン等主になるメロディ楽器にリズムとして曲の一部分を分担し演奏することが多い。メロディを奏するような華やかさは無いものの、打楽器にはリズムのダイナミックさや高揚感、リズムアンサンブルが生み出す掛け合い（リズムのコミュニケーション）や一体感を味わう醍醐味がある。

その中で、鍵盤ハーモニカは保育現場で唯一用いられているメロディ楽器といっても過言ではない。しかし保育現場では、1曲全てを鍵盤ハーモニカで演奏することは経験的にも技術的にも困難なため、指導の導入段階では曲の一部分を演奏する分担奏や、メロディに合わせた簡単な対旋律を演奏するオブリガード奏法が用いられている⁴⁾。これらの経験を経て、徐々に演奏の音域を増やししながらメロディやリズムの高度な曲へと指導が進められているのである。

3、鍵盤ハーモニカについて

鍵盤ハーモニカは、昭和 20 年後期に登場した音楽教育楽器で、ホースや吹き口（笛口）で息を吹き込み、リードを振動させて発音する構造になっておりハーモニカの一種である⁵⁾。楽器メーカー各社により商品名・呼称は様々で、ヤマハは「ピアニカ」、スズキ「メロディオン」、全音「ピアニー」となっており、その総称が「鍵盤ハーモニカ」である。各社の特性として、ヤマハ「ピアニカ」は、『特殊防錆塗装によりリードから錆を守り安定した正確なピッチ』、スズキ「メロディオン」は、『独自に開発したリードにより、吹く息の強弱に敏感に反応でき、トレモロ・ビブラート等高度な演奏技術に対応』、全音「ピアニー」は、『独自のふえ室設計によりリードを滑らかに振動させ明るく響きのある透明な音色』⁶⁾を挙げている。鍵盤ハーモニカにはソプラノ・アルト・バスの三種類があり、24 鍵、25 鍵、（2 オクターヴ）、27 鍵、32 鍵、34 鍵、37 鍵、（3 オクターヴ）と音域も豊富である。保育現場及び小学校では、32 鍵のものが広く使用されている。演奏の仕方は二種類あり、座って鍵盤ハーモニカを机に置き、ホースを用いて演奏する方法と、立って左手で鍵盤ハーモニカを持ち、吹き口を用いて演奏する方法とがある。

鍵盤ハーモニカは、ピアノやエレクトーンと比べて鍵盤が小型なため、幼児の小さい手でも演奏が容易である。また楽器も軽量なため取り扱いも楽で、鼓笛隊などの動きのある活動にも適している。鍵盤楽器と吹奏楽器の特性を持つこの楽器は、鍵盤学習と吹奏学習を同時に行えて、またアンサンブルを豊かにする音色を持つことから、広く音楽教育の場で親しまれている。一方で、吹奏楽器であるため、タンギング指導は見逃すことができない。導入期の分担奏やオブリガード奏法では息の短いタンギングを行えばよいが、メロディを演奏するようになると、一息でワン・フレーズを演奏することが必要になってくる。短いタンギングだけではメロディは切れ切れとしたものになってしまい、フレーズ感のない演奏になってしまう。息を長く吹き込みながらのメロディ奏は幼児にとって難しいが、曲や奏法に合ったタンギング・テクニックが不可欠である。とかく鍵盤指導に重きが置かれやすい鍵盤ハーモニカ指導でのタンギング指導は避けて通れない点である。

4、実際の器楽指導

本章では、筆者が上田市内 M 保育園（以後 M 園）にて行っている鍵盤ハーモニカ指導を例にあげて、保育現場における器楽指導について検証したい。

M 園では通常の保育の他に、平成 12 年度より外部から専門講師を招き、特別活動として『音楽あ

そび教室』を導入し現在も継続して行われている。指導内容は歌唱指導、リトミック・身体あそび、音感・リズム指導、リズム楽器や鍵盤ハーモニカ等の器楽指導、わらべ唄を使った輪遊び等の伝承あそび等で、3歳児、4歳児、5歳児の各クラス（1クラス平均30名）で1回40分程度、月に2回のペースで行われている。本稿で取り上げる鍵盤ハーモニカ指導については、3歳児では音名やリズムの理解が追いつかないこと、またホースに息を吹き込みながらの鍵盤奏は身体的にも困難なことから行わず、予備段階としての音楽指導が行われ、4歳になってから鍵盤ハーモニカ指導が導入される。

(写真1)

① 指導内容とその方法

ここでは『音楽あそび教室』で行われる鍵盤ハーモニカに関わる指導内容を、年齢（クラス）別に取り上げる。

3歳児クラスでは鍵盤学習予備段階としての指導が行われる。まず始めは筆者が『ドレミ山』と呼ぶもので、ドレミファソラシド・ドシラソファミレドの音列の上行と下行を山にたとえて、音程をつけながら音列を歌い音名と音程とを一致させて、絶対音感を養ってゆくものである。『ドレミ山』のトレーニングが定着し次に行うのが簡易メロディを用いた模唱である。模唱とは、指導者の歌った音名唱（メロディ唱）をオウム返しに模倣させるものである。模唱は繰り返し行うことで音感（音程感）が養われ、メロディに付随するリズムをも体得でき、加えて集中力をも高めることができるのである。また音名や階名によるメロディ唱は、フランス発祥のソルフェージュといわれるもので、音楽教育の基礎訓練として広く用いられる有効的な方法である。そして、模唱が定着したのを機にピアノが奏したリズムを手拍子で応答させる聴奏が行われる。様々なリズムパターンを繰り返し手拍子で体感させることでリズム感の習得を目的としている。

■写真1



■写真2



4歳児クラスでは『ドレミ山』を応用させて、フラフープを縦一列に8つ並べ、1人ずつドレミファソラシドと歌いながら一音一歩ずつフラフープを渡らせる活動から始まる。(写真2) 音列が一人一人唱えられるようになってから、次に指導者と園児とで音列を1音ずつ交互に言い合うなどして、ドの次の音はレ、ファの次はソというように、音名の関連性を理解させる。また3歳時に行ったメロディ模唱や手拍子によるリズム模奏が、4歳では音程が順次進行（隣り合う音からなるメロディ）から跳躍進行（ド・ミヤソ・ドのように3度以上離れた音程が含まれるメロディ）になり、リズム

聴奏は四分音符のシンプルなリズムから、八分音符や付点のリズムが含まれた少し高度なものになっていく。園児たちはリズムが複雑になるほど声をあげて興奮し、ピアノの繰り返し次々と異なるリズムに集中しながら、手拍子や足を踏みならすなどして応答する姿が見られている。音列や音程理解を経て多様なリズムに慣れたころ、『音楽あそび教室』では初めて鍵盤ハーモニカが導入される。演奏にはホースを使うスタイルと、吹き口を使うスタイルがあるが、後者は左手で鍵盤ハーモニカを持ちながら、つまり斜めに構えながら演奏するため姿勢が不安定で導入時の指導には適さない。このためM園では前者のホースを使い鍵盤ハーモニカを机に置き、鍵盤に対して正面から構える演奏スタイルを推奨している。導入時に初めて園児に演奏させる楽曲は、『十人のインディアン』および『ひげじいさん』である。以下にM園で採用されている演奏方法（分担奏）を示す。

●『十人のインディアン』 原曲：アメリカの歌/高田三九三訳詞

ド・ド・ド・ド	「三人いるよ」	レ・レ・レ・レ	「六人いるよ」
ド・ド・ド・ド	「九人いるよ」	ソ・ファ・ミ・レ・ド	

●『ひげじいさん』 作詞者不詳/玉山英光作曲

ド・ド・ド・ド	「ひげじいさん」	レ・レ・レ・レ	「こぶじいさん」
ミ・ミ・ミ・ミ	「てんぐさん」	ファ・ファ・ファ・ファ	「めがねさん」
ソ・ソ・ソ・ソ	「手は上に」	ソ・ファ・ミ・レ・ド	

指導はまず音名で音程をつけて歌わせる音名唱から始める。曲はいずれも園児の既習曲であるため、園児たちは抵抗なく歌うことができる。演奏に入る前に音名唱を行うことは楽曲全体を把握させて、加えて運指練習の助けになる。運指練習とは、演奏する音名に該当する指を曲に合わせて動かすことである。カッコで書かれた部分は心の中で唱えさせるようにして、演奏時には弾かずに休符＝お休み、と指導する。楽曲すべてを演奏する事はまだ困難なため、曲の一部分だけを演奏することで、園児に無理なく鍵盤ハーモニカ奏を導入することができるのである。これらの楽曲は、同音連打（同じ音を繰り返し奏するもの。ド・ド・ド・ドやレ・レ・レ・レの部分）や、順次進行（先の2曲では順次下行形。ソ・ファ・ミ・レ・ドの部分）など鍵盤演奏における最も簡単な奏法で出来ており、初めて鍵盤楽器に触れる園児たちには最適な楽曲と考えられる。また短く、繰り返しのある曲は覚えやすい。

5歳児クラスでは、4歳時に行った『ドレミ山』の活動にドシラソファミレドの下行形が加わる。音階の下行形は『十人のインディアン』や『ひげじいさん』で学習しており、1オクターヴ8音による下行形の導入で音列理解をさらに深めていく。『ドレミ山』は園児たちが喜んで行う活動の一つで、一步一步ゆっくり歩いてフラフープを渡る園児のほかに、ケンケンで渡ったり、スキップをしながら渡るものなど、楽しみながら活動する様子が見られている。ほかの園児が『ドレミ山』を行っている間、手拍子で仲間を応援しながらドレミを一緒に口ずさむなどして音階に興味を示す園児が多い。3歳時から行っているメロディ模唱やリズム聴奏では、聴き取る量が一小節から二小節に増え、シンコペーションや十六分音符のリズムが加わるなどかなり高度な課題ができるようになる。鍵盤ハーモニカでは、4歳時に経験した部分奏に加え、オブリガード奏法を取り入れた『かえるのうた』『ぶんぶんぶん』が導入される。指導は音名唱から行い楽曲全体を把握することから始まる。この二曲も園児のよく知る曲であり、加えて順次進行のみで構成されるため無理なく演奏できる。この段階までで鍵盤ハーモニカの演奏レパートリーは4曲になり、楽器や演奏に慣れてから次のステップとして『子犬の』

マーチ』『メリーさんの羊』『歓びの歌』『聖者の行進』等の応用曲に入る。これらの楽曲は5指ポジションで弾けるようすべてハ長調に移調して指導される。5指ポジションとは、鍵盤のドレミファソに親指、人差指、中指、薬指、小指とを固定させて音名と指、弾く鍵盤とを一致させて演奏させる鍵盤学習導入時に多く用いられる方法である。この方法により鍵盤上で手のポジション変更や指くぐりの心配がなく、演奏が比較的容易に行えるのである。この頃になると演奏前に必ず行う音名唱にも慣れ、園児たちは正しい音程でメロディに抑揚をつけて歌うなど、音楽性と共に確かなソルフェージュ力を習得していることが確認されている。と同時に指示を出さずとも、音名を口ずさみながら該当する指を動かし、鍵盤ハーモニカの弾き真似をする子どもが多く、積極的に取り組む姿から鍵盤ハーモニカ指導が定着している事が確認されている。練習は『音楽あそび教室』以外でも日常時にも行えるよう、講師(筆者)と担任保育士が連携を図り、練習方法などの確認がなされている。『音楽あそび教室』では集団指導のため、個別のケアが行き届きにくい。そのため音楽会前などは日常の保育時に担任が園児一人一人にきめ細かい指導を行っている。こうした指導の積み重ねで、M園の子どもたちの基礎音楽力が向上し、卒園までに8曲程度の演奏レパートリーを習得しているのである。

② 楽譜や楽器の工夫点

器楽指導、特に鍵盤楽器において音名とリズムとを楽譜から読み解く読譜力は不可欠である。しかし初心者や幼児にとって学習当初から読譜を強いるのは非常に困難で、特に幼児にとっては音楽活動の妨げにもなりうる。大人も子どもも鍵盤学習初心者は読譜を苦手とするものは多い。本学幼児教育学科に入学した鍵盤学習未経験者も、数か月の器楽授業及び日常の練習を経てようやく楽譜を読めるようになるものである。従ってM園『音楽あそび教室』で鍵盤ハーモニカ指導を導入する際も、読譜の煩わしさを取り除き、楽しみながら簡単に楽曲全体を把握し演奏できる方法を吟味した。

■写真3



■写真4



まず使用する鍵盤ハーモニカの鍵盤上にド・レ・ミ・ファ・・と音名シールを貼り、音の位置が一目で分かるようにした。(写真3) 鍵盤は通常黒鍵と白鍵から構成され、音名を判別するには黒鍵2つと黒鍵3つの配列を認識し、黒鍵と白鍵の位置関係を理解した上で初めて音名が導き出される。この判別作業はピアノ経験者にとっては容易なことであるが、幼児にとっては非常に煩雑でドの音を探すだけでも保育者の援助を必要とするところである。この煩わしさを無くするためにM園では色鍵盤を採用した。色鍵盤とは、色のついた音名シールを鍵盤上に貼ったもので、ド=ピンク、レ=水色、ミ=黄

色、ファ=黄緑、ソ=赤と色分けがされており、使用する色楽譜と一致させている。色楽譜とは色紙を丸く切り取りそこに音名を記し、奏でる順に模造紙上に並べたものである。この色楽譜の使用によって鍵盤上の色と楽譜の色とを一致させながら、該当する鍵盤を弾くことで読譜が可能である。(写真4) 仮名が読めない子どもにも壁に貼られた色楽譜を見ながら、鍵盤に貼られたシールの色を照らし合わせ、色楽譜の順に探り弾きができるのである。色楽譜は演奏すべき音(音名)を確認させるためのものでそこにはリズム情報は含まれていない。楽曲に伴うリズムは、指導の導入時に行われる音名唱指導により習得させているため、色楽譜には音名情報のみが記されている。

5、まとめ

前章にてM園鍵盤ハーモニカ活動の指導法や工夫点を述べてきたが、クラス担任・副担任への聞き取り調査(2008年12月実施)を基に、『音楽あそび教室』における鍵盤ハーモニカ指導の有効性と問題点を探り考察を加えたい。

まず現在行われている鍵盤ハーモニカ指導について効果や感想を聞いたところ、「音名唱をすることで楽譜を見ずに弾けるので良い」、「音楽あそび教室で行われる活動の積み重ねで、鍵盤ハーモニカ演奏ができていると思う」、「音名唱をしながらの運指練習は有効だと思った」、「色楽譜の使用が良かった」と現行の指導を評価する回答が多数を占めた。一方、鍵盤ハーモニカ指導で保育士が苦勞する点について聞いたところ、「すぐ覚えてしまう子もいれば、時間が必要な子もいる。どの子も楽しんで取り組めるとよい」、「5指を使える子もいれば、1本指でしか弾けない子もいる。どう対応したら良いか迷う」、「個別の援助が必要なため、クラス全体が揃うまでに時間がかかる」等の意見があがった。一般的に鍵盤学習は個人レッスンまたは保護者が同席してのグループレッスンが主流である為、保育活動時の集団指導では個々へのケアが行き届きにくいのが現状である。しかしM園で行っているように、『音楽あそび教室』の時間外でも担任が特に鍵盤ハーモニカを苦手とする園児に個別指導を行うことで、指導が行き届き全体のレベルアップを図っているように感じられる。

加えてM園『音楽あそび教室』の鍵盤ハーモニカ指導が毎年一定の成果を上げている要因は、総合的な音楽指導つまりソルフェージュの導入によるものが大きいと考えられるのである。いきなり楽器を与えて楽曲指導から始めるのではなく、まず予備段階として、音程を伴った音列の習得、模唱による音程感やリズム感の習得……。そして鍵盤ハーモニカ導入時の音名唱や運指練習を経て楽曲指導へと進めるこの方法は、鍵盤演奏に必要な要素(音列の理解・音感・音程感・リズム感)を少しずつ身につけながら行うので、保育現場では非常に有効である。特に『ドレミ山』や『模唱』は子どもたちがゲーム感覚で自ら楽しんで行う活動であり、遊びの要素や子どもの興味も加わり学習効果を上げているといえる。

一方5指ポジションについては、親指は成人も幼児もほかの指に比べて短かく、指の位置が他の4本と大きく異なるため、親指をドの鍵盤に置いた場合、それに続く人差指、中指がねじれたフォームになってしまい演奏姿勢に支障をきたす。鍵盤学習者が学ぶ『お椀形の手』で弾ければ問題ないのだが、この年齢での集団指導下では徹底が図れず、5本指での演奏ができない1本指奏法の幼児が出てしまうのも否めない。従ってこの年齢で親指=ドと、使用する指を固定させるべきかと迷うところである。ピアノの個人レッスンで学ぶ幼児たちにとって親指でドを弾くという事は最も基礎的なことであるが、これは個人指導が行き届いたレッスン下であるからこそ成せるのである。幼児期は特に個人の成長・発達の差が著しい為、保育現場における集団での器楽指導、特に鍵盤ハーモニカ指導では、

5 指ポジション奏を強いるのではなく、音への興味やメロディを奏でることでの達成感、仲間とともに音楽・演奏を楽しむ姿勢を尊重し、徐々に正しい演奏フォームへと導くことが第一と考えるのである。

本学幼児教育学科では保育者養成のため器楽指導（ピアノ）を行っている。習熟度別クラス編成をとり、ピアノ初心者と一定のレベル以上の経験者の2クラスに分けて授業を行っている。平成21年度幼児教育学科新入生に対して、ピアノ経験度調査（クラス分け）を行ったところ音楽コースの学生を除いた95名のうち約60%程度がピアノ初心者と判断されたⁱ。そのうち20%程度は読譜、特にへ音記号の読み取りに苦労していることから、音楽の基礎を習得していない学生が多いことを示している。このことから、保育現場同様にソルフェージュを導入した予備学習が必要と考える。楽譜の読みが不十分な学生にいきなり楽曲を演奏させるのではなく、ト音記号譜・へ音記号譜のメロディ唱等の鍵盤学習前のトレーニング・カリキュラムを新たに講じ、読譜力とリズム理解とを徹底させながら鍵盤学習に移行するのが望ましい。ただ、これは時間割や対象学生数によって特別クラスを設ける事がなかなか難しいため、初心者クラス内でも特に基礎訓練の必要な学生には適宜対応し、時に個別フォローも必要と考える。

保育現場や本学幼児教育学科の器楽初心者クラスでも、鍵盤演奏を主眼にした指導では総合的な音楽力は習得できない。音楽の基礎訓練（ソルフェージュや読譜訓練）を経た鍵盤指導により、誰かの助けを借りずとも楽譜を読み、ある程度演奏できる音楽的に自立した力が養われるのである。幼児たちは、音の出るものへの興味と、初めて目にする鍵盤ハーモニカという楽器への興味で『音楽あそび教室』で行うさまざまな基礎トレーニングも遊びながら楽しく活動しているため指導効果がみられたが、本学のように短大生ともなると、特にピアノ初心者は苦手意識が優先してしまい意欲的に取り組めないのが実状である。苦手な学生ほど練習時間が短い傾向にあるようである。在学の2年間で保育者として必要最低限の演奏力を習得するためには多少ハードなトレーニングも必要であるが、技術のみ追求すると音楽本来の意義を忘れかねない。音楽の魅力を再発見しながら、将来保育現場で音楽の喜びを子どもたちと共有できる音楽力を備えた保育者になってほしいと願ってやまないのである。

＜ 謝辞 ＞

本稿を纏めるにあたりご協力頂きました、財団法人極楽寺愛育園 みのり保育園の高橋比呂美園長先生はじめ諸先生方に深く感謝申し上げます。

註

ⁱ *obligato*(伊):メロディ同様に楽曲全体で欠くことのできない重要なパートで対旋律ともいわれる。

ⁱⁱ 西村政一著『幼児の器楽教育』建帛社、1984年、p.18

ⁱⁱⁱ 全国大学音楽教育学会編『幼児音楽教育ハンドブック』音楽之友社、2005年、p.56

^{iv} ヤマハ・スズキ・全音、各社商品カタログより引用

^v *self ege*(仏):現在ではもっと広義に総合的な音楽基礎学習を指し、楽譜の読みから楽典（音楽理論）や聴音・新曲視唱などをいう。

^{vi} 2009年3月31日プレ・オリエンテーションにて実施。ピアノ学習歴や学習曲を問う筆記調査と

